大久保貝塚（おおくぼかいづか）

宮城県教育委員会

1. 調査要項

所 在 地：本吉郡南三陸町志津川字大久保
調査原因：水尻川河川災害復旧計画堤防建設
　　（東日本大震災復興事業）
調査期間：令和元年９月９日～令和２年７月28日
調査面積：150 ㎡
調査主体：宮城県教育委員会
調査協力：南三陸町教育委員会
調査担当：西村力，山田晃弘，梅川隆寛，須田良平，
　　古川一明，村田晃一，伊東博昭，佐藤渉，
　　熊谷亮介，大内望咲（南三陸町）

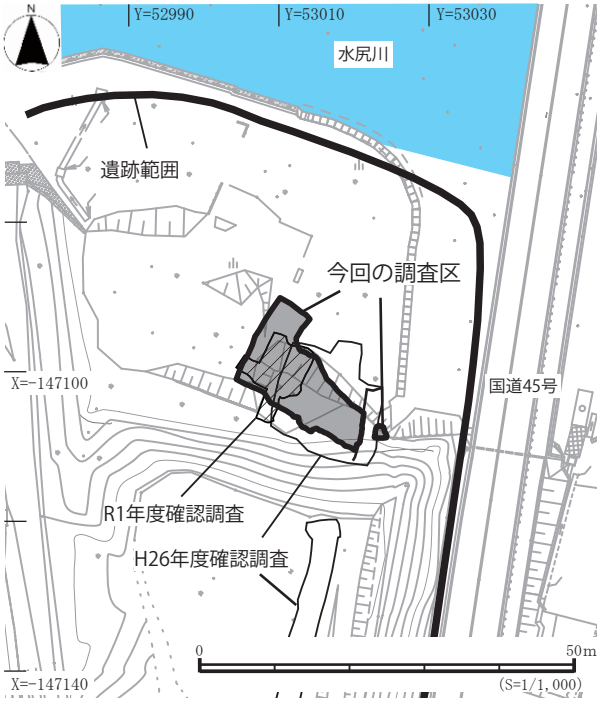

図１．　遺跡範囲と調査区の位置

2. 調査の概要

大久保貝塚は南三陸町志津川字大久保に所在し，志津川湾の湾奥部，水尻川河口南岸に位置する縄文時代晩期を中心とする貝塚です（写真１）。

平成26年度に国道45号の復旧に伴う確認調査が行われており，水尻川に面する丘陵北斜面に良好な残存状況の貝層（かいそう）・遺物包含層（いぶつほうがんそう）が分布することが分かっていました（図１）。今回，遺跡内に河川堤防建設事業が計画され，貝層・遺物包含層の全域が対象範囲に含まれることから，遺跡を現状保存するための協議を重ねましたが，計画変更が困難と判断されたため，工事に先立ち令和元年９月から令和２年７月にかけて本発掘調査を実施しました。

調査区は，貝層・遺物包含層を地形に沿って１区～７区に区分し（図２），貝層の残存状況の良好な２～４区については，可能な限り層を細別して発掘を実施しました。調査では，一部の層を除き，すべての土壌を土嚢（どのう）袋に入れてサンプル番号を付けて採取しました。土壌サンプルは合計4,468袋で，4㎜・１㎜目の水洗フルイによって，遺物などを回収しました。

3. 調査成果

(1) 貝層・遺物包含層

東西・南北約20ｍにわたって分布しています。層の厚さは東側で約1.2ｍで，西側にかけて薄くなっています。後世の撹乱（かくらん）によって北東側は地山まで，西端の７区は５層までが失われています。堆積層は北に向かって傾斜しており，10層に大別され細かな特徴の違いによりさらに細分されます（図３・写真４）。

写真１．　調査区の位置（北東から）

図 2.　調査区平面図

貝層は，1 ～ 3 層の上部貝層と 7 層以下の下部貝層に大まかに区分できます（図 2・写真 2）。上部貝層はアサリを主体とし，クボガイ・カキなどを含みます。3 層は土と貝の割合などから 3a ～ 3f 層に区分でき，3c 層で貝の割合が最も高くなっています。大量の遺物を含み，特に残存状況の良い 2 ～ 4 区では，構成する貝や土の違いから，径 1 ～ 2m，厚さ数 cm ～ 10 数 cm の細別層（約 120 ～ 300 層）に分けることができます。この場所がゴミ捨て場として利用されており，食料の残滓（ざんし）や使い終わった道具を当時の人々が廃棄した状態をよく残していると考えられます。出土遺物から縄文時代晩期中葉～後葉に形成されたものと考えられます。

7b 層～ 9 層の下部貝層は，カキを主体としアサリなどを含み，焼けた貝の割合が高いのが特徴です。分布には粗密があり，複数の小さなまとまりに分けることができます。少量の土器が出土しており，縄文時代後期中葉に形成されたものと考えられます。

2 層と 6b 層は均質な砂で，洪水などにより短期間に堆積した層と考えられます。また堆積層中には，岩盤由来の風化礫（ふうかれき）の角礫が多く含まれますが，6 層以下では水の影響で角の取れた亜円礫（あえんれき）～円礫の割合が徐々に増えていきます。堆積が進み，この地点が徐々に離水（りすい）していった状況がうかがわれます。

写真 2.　貝層調査状況（北から）
※ 3・4 区は上部貝層，5・6 区は下部貝層

写真 3.　5 区焼け面検出状況（北から）

(2) 土坑，焼け面など

3 区～ 7 区の 7b 層から 10 層上面にかけての平坦面で，土坑など 15 基，焼け面 22 箇所などを確認しました（図 2・写真 3)。これらの遺構は，7 区を除いて下部貝層と概ね同じ範囲から見つかっています。また，下部貝層の貝には焼けたものが多く含まれること，埋土や出土する土器の特徴が類似することなどから，これらの遺構と下部貝層は同時期に形成されたものとみられます。砂礫の広がる丘陵下の水辺近くで，火を焚くなどの小規模な活動が繰り返し行われていたとみられます。

(3) 遺物

約 1,200 箱分が出土しました。縄文土器は上部貝層を中心に大洞 C2 式～ A 式（縄文時代晩期中葉～後葉）の特徴を示すものが多量に出土しています（写真 5)。また土面，土偶などの土製品も見られます（写真 6)。石器･石製品には，遺跡の近くで採取可能な粘板岩を用いたものが多くみられます。

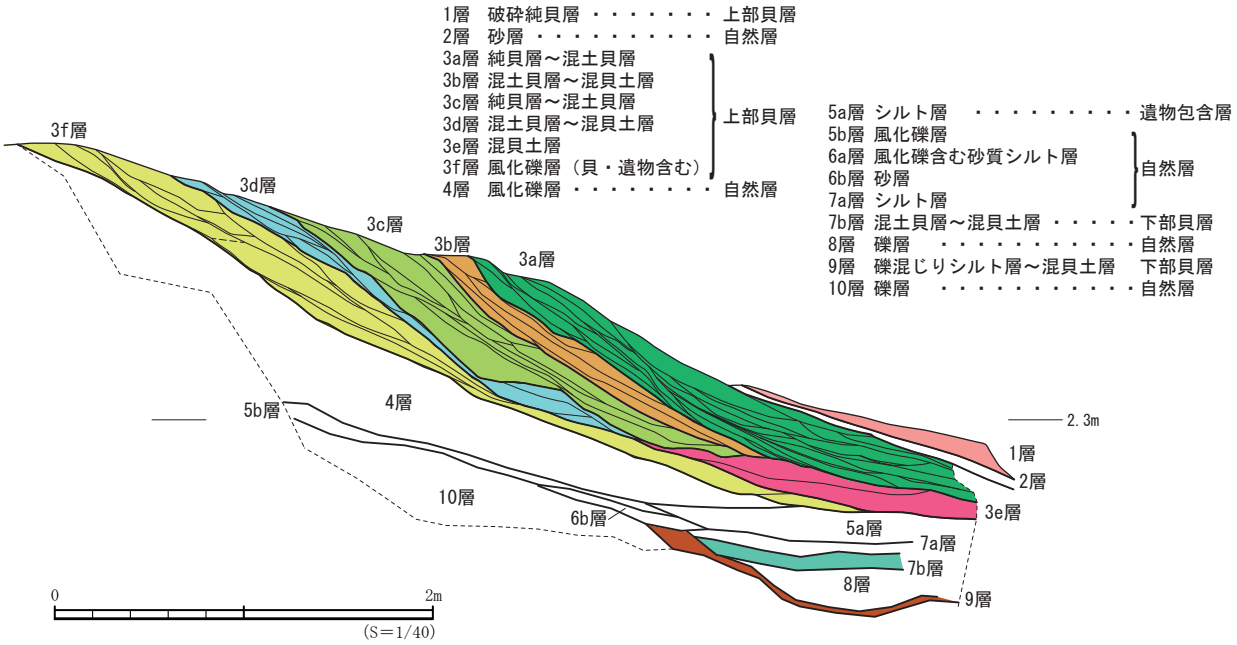

図 3.　3 区東壁断面図

写真 4.　3 区東壁南北断面

骨角器は篦（へら），ヤスが多く，銛頭（もりがしら），釣針（つりばり），鏃（やじり）なども少量見られるほか，装飾品も多数出土しています（写真 8）。動物骨や魚骨も多く出土しており，特にシカ・イノシシ・鳥骨が多くみられます。中には石鏃（せきぞく）が刺さった状態の骨もあり（写真 10），当時の狩猟などの生業の様子をうかがうことができます。また，外側を編布（あんぎん）で覆われたアスファルト塊（？）のような希少な遺物も見つかっています（写真 9）。

4. まとめ

①縄文時代晩期中葉～後葉にかけて形成された貝層・遺物包含層（ゴミ捨て場）を非常に良好な状態で発見し，全面を調査しました。当時の人々の狩猟・漁労などの生業を知ることのできる良好な資料といえます。

②縄文時代後期中葉に形成された貝層，土坑や焼け面などを発見しました。丘陵下の水辺が小規模ながら繰り返し利用されている様子が明らかになりました。

写真 5.　縄文土器
右端の土器の高さは約 12 ㎝

写真 6.　クジラ椎骨出土状況
椎骨の径は約 30 ㎝

写真 7.　土面，土偶
土面の残存長は約 13 ㎝，残存幅は約 13 ㎝

写真 8.　骨角器類
※（左上）石鏃と根ばさみは別々に出土したもの

写真 9.　編布で覆われたアスファルト塊（？）
アスファルト塊（？）は長さ約 8 ㎝

写真 10.　石鏃の刺さったマグロ（左）
とシカ（右）の椎骨